



## ふるさとの歴史、伝統から



## 市民の郷土芸能を

### 21世紀の南国市は

旧町村の合併で、南国市がひとつの自治体としてスタートを切ったのが昭和三十四年十月。早いもので、すでに四半世紀の年輪を刻みました。

また、全国に鳴らした「よきこい節」の#年にお米が二度取れる、は昔語りになり、変わってビニールハウスの群れが、本市の農業の変遷を物語っています。その農業の変遷、すなわち農業の近代化、集約化は、同時に南国市の産業構造の変化や人口の流動をもたらしています。かつての一次産業都市は、徐々に二、三次産業に比重を

移しているといえそうです。やがて二十一世紀。そのとき南国市はどんな表情を私たちに見せてくれるのでしょうか。



ジェット機の飛び交う空の玄関

## 市が輝き始める街のシンボルを

「いらつしゃい、よっこそ南国市へ」。大勢の人々が、空から陸からやって来ます。人や物や情報が集まり県下各地に移動していくターミナル。南国市は高知県の玄関、かなめとしての役割を担うことになりそうです。そのとき、私たちの南国市は高知を訪れる人々が「寄ってみたいな」と思う魅力的な都市になっているでしょうか。市の中心地、後免町付近では基盤整備が遅れ、これといった文化的な行事も潤いもありません。残念ながら市民が触れ合いを求めて集まる「街」としての機能が十分でない、文化的な空間となっていないのです。市民にとって「街」とは結局高知市が中心地なのです。

これではいつまでたっても高知市中心の発想から抜け出せず、独自の文化意識や市民意識は育ちません。依然として南国市は旧町村の寄り合い所帯でしかないという印象がつきまとっています。



南国インターチェンジ完成予想図

## 『まほろば』を文化イベントにする

魅力ある街には、その街固有の文化的な伝統、雰囲気、行事などがあり、それが市民の誇りとなっています。南国市はどうでしょうか。

起こります。しかし、市民の自主的な取り組みが文化水準を引き上げ、やがて施設の整備へと発展していく事例が少なくありません。そこで提案します。

都市の基盤や文化施設の整備は今後の課題ですが、市民が中心となった文化の振興は、それほど大きな資金も必要とせず、その気さえあれば、今すぐにでも始めることができます。

南国市に郷土芸能をつくってみませんか。名付けて「土佐のまほろばやし」。南国市の風土や歴史をテーマに作曲し、南国市の文化的なシンボルとするのです。

このような提案をすると必ず、施設の整備が先決だという議論が

男女、経験の有無は問いません。いろいろな機会や催しに演奏し、

近い将来、これを中心とした一大文化イベントをつくるのです。こうした活動が南国市に文化を生み出す一歩になると思います。空港や高速道路がいくつ整備されても、ほんとうに市民が住んでみたい街づくりをしなければ、高知市への通過都市、衛星都市の位置から抜け出せないでしょう。市民と行政が呼応して南国市を魅力ある都市に。今、南国市にとって最も必要なことではないでしょうか。